

環境音楽から環境音へ

塩川博義

日本大学助教授

環境音楽の作曲家・吉村弘の音環境デザイナーとしての活動は、1982年の「ナイン・ポスト・カード」から始まる。「ナイン・ポスト・カード」のCDにある吉村氏が書いたライナーノートによると、このアルバムを制作中に、当時、品川に出来てまもない原美術館を訪れ、「今作っているこのアルバムをここで流してみたら、どんな風に響くのだろう。ひょっとするとこの環境にあう音のひとつになりうるのではないだろうか。」と思い、ミックス・ダウン後テープを美術館へ持って行き、お願いして美術館で流して貰ったと述べている。そして数週間後、「来館者に聞かれるのですが、この音楽はどこで手に入りますか。」と美術館から問い合わせの電話があったのがきっかけでレコード化されたのである。今では、美術館に音楽が流れていることは、さほど珍しくはないが、当時は画期的なことだった。

エリック・サティから始まる環境音楽は現代音楽のひとつであるが、吉村氏が出現するまで日本では、あくまで音楽の範疇から抜け出せなかった。20世紀における現代音楽の巨匠、ジョン・ケージの代表作「4分33秒」は周りの環境音を3楽章に分けられた音楽にしたが、これは環境音楽を環境音にしたわけではない。1978年に発売されたブライアン・イーノの「ミュージック・フォー・エアポート」も環境音楽の代表作であるが、我々はどこかの空港で流されたものを聴いたわけではなく、あくまで自宅の居間にあるスピーカーから流れてくる音楽として聴いていた。すなわち、1982年の吉村氏のこの行為は、日本における環境音楽をある空間を構成する環境音のひとつにする始まりだった。そして、この原美術館のための環境音楽の後、1983年に釧路市立博物館のための環境音楽の制作へ続く。建築家・故毛綱毅曠氏により設計された釧路市立博物館は1984年に日本建築学会の学会賞を受賞し、内部に環境音楽が流される博物館として、一躍有名になる。そして、1985年に板橋区立美術館で行われた若手建築家とのコラボレーション・イベント「都市に棲む」がある。「都市に棲む」のイベントには、現在、第一線で活躍している建築家が名前を連ねており、その中で、吉村氏は「空気に近い音楽」について語り、このイベントのために7曲を作曲している。この時期は、ちょうど私が吉村氏のところへ通い始めた頃で、のちに「サラウンド」を作曲してもらったための参考資料として「Pier & Loft」と「都市に棲む」のための作品「Cloud Study」のテープを偶然にも頂いたのである。今回の回顧展のために吉村氏の作品を整理したが、この「Cloud Study」のマスターテープは発見されなかった。そのため音質は悪いが、私が所有しているテープを使用している。この「都市に棲む」のイベントはあまり広く知られてないが、当時、吉村氏が建築家から高い評価を得ていたことがうかがえる。

その後、1984年の松本市ピレネービルにおける時報の制作

をきっかけに、吉村氏の活動は建築空間から都市あるいは公共空間へと外に飛び出す。1986年の多摩市サウンドスケープ・プロジェクト、1989年の名古屋市庄内緑地公園サウンドスケープ・プロジェクトを経て、90年代は1991年の東京における地下鉄南北線のサイン音から始まり、そして、2001年の神戸における地下鉄海岸線の音環境デザインで終わる。面白いことに、1980年代後半の活動プロジェクトだけにサウンドスケープという名前がついている。時代を感じる。

それ以降は建築空間に戻り、2002年の大洗水族館の音環境デザイン、そして、2003年、今回回顧展が行われている神奈川県立近代美術館の開館および閉館のために作られた環境音楽「フォア・ポスト・カード」が遺作となった。

このように吉村弘の音環境デザインの活動は美術館で始まり美術館で終わったが、一貫して変わらないのは、吉村弘の環境音楽は周りの環境音の一部になっていることである。